

日本市民の謝罪を携えて 「ストーンウォーク」が 韓国の大地を歩くことを夢見ている

■ 木村 ^{オッチョ} 玉祚

様々な戦争の中で死んでいった無名の人々を鎮魂する巡礼者たち「ストーンウォーク」チームとしばし歩いた。広島と長崎に対する原爆投下という米国の国家テロを謝罪するために、今年日本にやってきた「ストーンウォーク」。排気ガスを吸い込み、埃をかぶりながら、時速3kmの「ストーンウォーク」の巡礼者たちに、夏の日差しは容赦なく突き刺す。「ストーンウォーク」に参加した人々の間に融和や連帯が生まれた。スピードを追求する現在の価値観と逆行するような時速3kmの巡礼は様々な疑問に対して自問自答する歩行であった。

「ストーン」をひいて歩いたところで、被爆者たちが満足するような謝罪になり得るのか？ 戦闘やテロによって地上から抹殺されていった名もない人々たちを慰めることになるのか？ ハイテク武器の前で、あまりにもプリミティブで無力な「ストーンウォーク」が平和の創造のために何ができるのか？ こうした批判や疑問が私の心に次々と沸き起こった。

私にとっての「ストーンウォーク」は「罪の償い」の象徴的行動である。この夏、「ストーンウォーク」と同じ使命を持ったアメリカ人の一組の夫婦が時を同じくして来日した。国家の名で行われた戦争犯罪を一般市民が謝罪することに私の関心は集中した。戦争における国家犯罪の責任者は裁かれなくてはならない。犠牲者に対する国家補償もすべきであると思う。国家にその責任を遂行させると

いう責任が私たちに
はある。しかし、一市民として謝罪を表明することの有効性と同時に限界をも認めないわけにはいかない。

私たち市民も国家の犯した犯罪に上塗りするような過失を犯し、民族間の憎しみを増幅するような言動を家庭内において地域社会においてしてきた罪を負っていないだろうか。私は在日3世の韓国人である。かつて私はインドネシアに17年間滞在したとき、「イアンフ」被害者たちの調査をしたことがある。朝鮮人兵が日本兵を補う形で慰安所を警備し、現地の女性に日本兵以上の残虐な行為をしたという証言を聞いた。これは一兵士の偶発的な犯罪というよりも、差別構造に基づいた蛮行であると思う。戦争体制の中では「普通の人」が「異常な行為」をやっている。戦争は人間を狂気にさせる。「ストーンウォーク」はその素朴な行動のゆえに、かえって、戦争の狂気を私たちの意識に浮かび上がらせてくれる。

在日朝鮮人のあいだには差別ゆえにいつまでも戦後の貧困から抜け出せなかった経験を持つ者が多い。日本が敗戦したとき、日本で暮らしていた朝鮮人たちの多くが難民となった。月日を経て安定した生活ができるようになると、まるで昔から日本に暮らしていた日本人のように振る舞い、アジアから助けを求めて日本海を渡って来る難民を冷たい眼差しで見



石碑はウオーカーを増して広島平和公園に近づく。8月4日

ていた在日が多かったと思う。これは一例である。しかしこのような振舞いが在日の特質であるとは思わない。日本社会で生き残るための一つの選択であったのだろう。朝鮮人兵士の残虐行為もそのような選択であったのかもしれない。

在日は日本社会と韓国社会の両方から差別され、地球のどこにも着地しきれない経験をもつ。だからこそ、私は「ストーンウォーク」が次に韓国に上陸することを希望している。そこで「謝罪」というテーマがさらに大きく迫ってくる。日本の市民の謝罪を携えて「ストーンウォーク」が韓国の大地を歩くことを夢見ている。私は日本人と結婚し、4人の子を授かった。私の子どもたちが日本人であるということは、私自身も日本の戦後責任を負っているということである。無名の犠牲者たちの死を悼むという「ストーンウォーク」の目的は「謝罪」によってより明確に平和への意思を世界に宣言することでもある。韓国朝鮮人と日本人の和解の上に私たちを在日韓国朝鮮人の安住の着地点があると信じる。このような和解を待望している民族が世界のいたるところに存在し、「ストーンウォーク」が上陸するのを待っている。



やはり広島のお好み焼きはおいしかった。後列右から3人目が筆者



北九州市の光隆寺で出発前の黙とうです

平和であってこそ職場での人間らしい労働条件をつくりあげることが可能だ

ストーンウォーク福岡 ■ 本村 真

北九州の私たちが福岡の仲間たちから「石」を引き継いだのは、7月16日午前中の鐘崎海岸からでした。長崎の出発式や鳥栖での佐賀からの引継ぎにも行きたかったのですが、毎日の仕事や活動のやりくりがつかず、北九州の準備をするのが精一杯でした。

私たちというか、私がこの話を最初に聞いたのは5月2日、築城の航空自衛隊の前で「毎月2の日」の座り込みをしている現場でした。「9・11の遺族のアメリカ人が碑石を引っ張って長崎から広島まで歩くらしい、手伝ってくれんね」と、誘われたことからでした。

長崎から広島まで600キロを歩く。アメリカ人が歩く……。不謹慎と怒られそうですが、「面白そう、でも、きつそう」が最初にうかんだ気持ち。準備の議論の過程で「9・11で家族を失った人が、自分の体験と原爆から60年の年にアメリカ人として謝罪を表明する」「ほっとくわけにはいかんでしょ」「彼らだけを歩かせるわけにはいかんでしょ」「自分たちの運動にしないと」とだんだん関わりのかたがちがはつきりしていきます。

北九州の特徴は、議論よりも具体的な準備の方が先行します。コースを下見しよう、石と台車を置く場所を確保、ただで宿泊させてもらえる場所を探せ、引っ張る人を、お金は。

一日だけのパフォーマンスや集会とは違う、北九州だけでも4日間の行動。し

かも歩き。じわじわと、とんでもないことをやってくる……。ような気がします。

そして、当日。案ずるより生むがやすしです。

私たちは地域で活動している「ひとりでも入れる労働組合」ですが、いろいろな反戦平和運動にも参加してきました。それは、平和が労働者の権利の最大のものであり、また平和であってこそ職場での人間らしい労働条件をつくりあげることが可能だと、自分たちなりに考えているからです。いま戦争とグローバリズムという怪物が、世界中で命と暮らしを奪いつづけています。

「そういうことで、石を引っ張ります。暑さの中、歩きとおします。むずかしいことを抜きにして、少しでも一緒に歩くことをお願いします」組合の会議で訴えていきました。

鐘崎から彦島まで、約50キロ。600キロからすれば12分の1。少しでも助け合おう。最初は違和感のあった碑石への祈りも、だんだん、祈るような気持ちが伝わる。もくもくと平和のために歩く。これが祈りなのかもしれないと思う。最初はうるさいと思った日本山妙法寺のお坊さんたちの太鼓の音が（ごめんなさい）、歩くリズムになる。

組合としてはトラック業界の深刻な労使関係にある遠賀運輸にも、このことで



ユニオンの交渉で遠賀運輸は社長も出て来て激励してくれました

は協力を申し入れ、「平和のための」共同で、16日には台車を置かせてもらいました。

総括の会議で「シンプルな運動だったから、みんなが協力してもらえた」と、歩ききつさとの交換で得た、これからの運動への直感を思わず述べてしまいました。

下関で、アンドレアたちとの別れの抱擁。「がんばって、広島でまた会おうね」涙が出てしまいました。

8月4日、広島ストーンウォーク到着式。行進の先頭にいつもいる在日のお坊さんであるチョウさんの杖の上に赤い布切れが見えた。下関で仲間が落とした組合の腕章、それを拾ってくれたチョウさんが、ずっと杖につけて広島まで。ここでも涙。

こんな運動と出合ったこと。こんな人たちと出会ったこと。すばらしい夏でした。この感動を忘れずに、これからも一緒に平和のためにみんなと歩き続けたい。

汗と涙のストーンウォーク。またどこかを歩きたいですね。



下関市の彦島の水門が上がって通れなくなるからと急いで、間に合いました



重たい石も人さえ多ければ余裕で進む